戦旗

一九六〇年九月二七日発行
発行所
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所
編集 発行人 鏑木潔
一部 拾円

万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟を
すべての工場に組織せよ！
共産主義者同盟

「戦旗」固定購読
お申込みは
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所内
戦旗経営局
振替番号東京一二一〇四番
定価 一部 十円
月 四〇円 送料五円
半年 二四〇円 送料三十円

安保斗争と同盟活動の総括（下）

同盟再建と前衛党建設の課題

岸本健一　山崎衛　青山到
森茂　田川和夫　戸坂賢一

三、闘いの経過と同盟の活動（続）

さらにそれは十二・一〇の方針をめぐる斗いに引きつがれ、総評、社、共、の既成指導部は、この新らしく切り開かれた局面を徹底的に拡大し斗争を発展させるのではなく、逆に「挑発」呼ばわりを行い、労働者に混乱をおこさせると共に、次の斗いの弾圧者として登場してきた。かくして総評日共は十二・一〇斗争を、全学連、地評、社会党青年部など、下部労働者の戦斗的気分を反映して出された、「国会再包囲」斗争を圧殺するばかりか、自から設定した生産点斗争すらも打切るという、完全な裏切りを行つたのである。

わが同盟は、このときいわば、はじめて労働者階級の前に公然たる姿を現わした。

そして、十二・一〇の国会再包囲の方針を同盟は大衆的に提起し、その実現のために斗つた。

同盟書記局は、弾圧反対のための行動を呼びかけるとともに、「この、連日の弾圧反対デモ」によつて、この「流動化」している状況を持続させ、拡大する方針を提起した。東大における「籠城斗争」も、この観点にしたがつてだされたものであつた。

しかし、一一・二七によつてきりひらかれた「流動」状況は、連日のデモによつてさらに拡大できる内容をもつてはいなかつた。むしろ、この時点で、明確にされるべきことは、十二・一〇にむけて、国会再包囲を実現するために、あらゆる活動がしぼられるべきであつたのであつた。このことこそ、総評が、後退し、十二・一〇国会再包囲を回避するために、生産点斗争をうちだし、それにたいして東京地評などが、国会再包囲を主張し、激しく批抗している時点で、さらに斗争を拡大するために必要だつたのである。十二・一〇国会再包囲の方針が、かなりまえから提起されながらも、弾圧反対斗争が自己目的化されていくことによつて、十二・一〇の国会再包囲にたいするとりくみが、不十分なまま、おわつてしまつたのである。

だが、こうした労働者階級全体から見た同盟の方針の検討からではなく、すべては学生運動における敗北十二・一〇国会再包囲の失敗から問題は考えられた。

学生運動内部における日和見主義の潮流に対する敗北が、敗北のすべてとされ、それは「同盟のボリシエヴイキ化」という教訓として、うけとめられ、それが、それだけとりだされて、「根性」の問題として、固定化されていつた経過が、四回大会の空虚な革命論議の一つの原因をなすのである。敗北は、たしかに学生運動内部における同盟の非ボルシエヴイキ的状況によるとの指摘は正しい。しかしそれは、他ならぬ同盟全体の、こうした指導の見誤のうえに立つた指導がなされていなかつたところにまず求められねばならなかつたのだ。

調印の日程が近づくにつれて、斗争目標は、大衆に、切迫感をもつて、うけとられていつた。羽田デモをめぐつて激烈な斗争が、かつてない規模で斗わされていつた。十二月十二日、社党中執委、羽田デモ決定、十二月十九日、国民会議幹事団体会議、「岸渡米の、羽田における渡米阻止の抗議集会への大規模動員」決定。

しかし翌日から、総評の「羽田デモとりやめ」の策動が開始される。日共は、はじめから、一貫して、羽田デモに反対し、「メーデー規模の中央集会を岸渡米の前（一・一四）に行う」ことを主張していた。

総評は、羽田デモ中止の理由として「統制違反の危険をなくすことができない」ことをあげた。日共の反対の理由は「トロッキストの挑発の危険がある」ということであつた。民同は、その改良主義、議会主義からして羽田デモに反対したのである。そこには、斗いの指導権をわが同盟と全学連に奪われまいとする「慎重な配慮」があつたことはもちろんである。

わが同盟とそれが指導的影響をもつ全学連は、この総評、日共の裏切りを糾弾する急先鋒にたち、羽田デモを徹底的に追求した。

この論争は、単なる戦術論争ではなく、日共、社民の日和見戦略にもとづく戦術の裏切り性を徹底的にあばきだすものでなければならなかつた。

だからこそ調印を目前にひかえた緊迫した空気のなかで、調印阻止斗争を放棄しようとする総評、日共の方針にたいする、中堅、下部活動家の反対の声は、いたるところであげられた。

十二・十九東京共斗会議「岸渡米実力阻止」決定。

十二・二四青学共斗第一回全国大会、羽田デモ方針を決定

十二・二五、国民会議全国代表者会議での圧倒的な羽田デモの声、

これらの会議はすべて、中堅、下部活動家の圧倒的多数が、「羽田デモを要求」していることを示していた。国民会議幹事会の、全国代表者会議を無視した「羽田デモ」をとりやめの決定にたいして、東京地評、地方地評の抵抗がつづく。

東京地評は総評の機関からのしめつけで真二つに割れながら、民間中小単産を中心に東京共斗の窓口を通じて、「羽田デモ実行委員会」を組織して、羽田デモを最後まで追求しようとした。

しかし、羽田デモを実際に貫徹できたのは、わが同盟とそれが指導的影響をもつ全学連のみであつた。東京地評をはじめ、地方地評の活動は、ことごとく、総評の単産機関を通じての徹底的しめつけと、日共の党をあげてのぶつつぶし工作によつて、挫折させられていつた。

羽田斗争は、十一・二七斗争の切り開いた安保斗争の新たな局面をひきついで、調印阻止の最終段階での決戦としての戦斗的な斗いを最後まで追求し、そして岸全権団に政治的にきずをつけることに成功した。

それは、労働者階級の斗いとしては勝ちぬけず、学生運動の斗いとして斗いぬかれたが十一・二七の経験と、それ以後の労働者階級内部における論争の上に立つた斗いとして、労働者に大きな感銘を与えた。

ブルジョアジーは弾圧、思想的宣伝において一切の手段を動員して、この斗争を徹底的に攻撃し、日共はこれを「挑発と冒険主義の現れ」として攻撃し、民同もこれを「統一行動を排した」故に精神的に攻撃はしないまでも、支持しなかつた。

しかし、戦斗的労働者は、この斗争の評価をめぐつて、民同、日共と激しく斗つた。全学連支持の日共の学連攻撃に対してインテリゲンチャの一部分にも、運動が起つた。

羽田デモを主張した一切の勢力が、最後まで斗いぬけなかつたのに対して、同盟がこの斗争を最後まで斗いぬいたことは、同盟の問題を全学連の問題と同時にこの様に、労働者の中に大衆的に提起したのだつた。

当然そこで同盟が、同盟の理論によつて、基幹産業労働者を獲得するために全力を注がねばならぬときであり、そして、同時に、この全学連の斗いによつて形づくられた新たな潮流全体を同盟のまわりに結集する統一戦線戦術の問題が考えられねばならなかつた。

羽田斗争を、同盟が学生運動をもつて斗いぬいた、次に問題になるべきことは労働者階級の活動を、さらにさらに強化することであつた。

だが同盟は一月から三月まで、その様に自らに問題を提起し、その様に自らを前衛党として建設することをなし得たであろうか。

たしかに、そういう努力が行なわれなかつたわけではなかつた。だが、十一・二七、一・一六斗争によつてわれわれが労働者階級の面では、まだやつとはじめたばかりであるという現状を正しく評価せずに「同盟が階級斗争の主人公になつた」とか羽田斗争の労働者内での推進力となつた、革同、高野派等のわれわれの党の立場からの理論的、思想的評価ぬきの「一・一六で労働者階級の新たな左翼的結集の萌芽が生まれた」とかの、内容の十分な検討なしの評価が行なわれ、それが一・十六以後の、理論的、思想的活動の決定的立ちおくれ、労働者の組織的獲得の立ちおくれの大きな原因となつた。そして、それらの問題点は、四回大会の混乱の原因を形づくるのである。

（ロ）同盟四回大会の問題点

四回大会の問題が、そこで一権力獲得の戦術思想一の問題が他面の階級斗争、特に安保斗争の問題をぬきにして、無媒介的に論じられ、そして一方、安保斗争については、それと全く別のところで、当面の斗争として強調されたにすぎなかつたという点にあつたことは、これまでもすでにしばしば指摘されてきた。

この間の問題は、どの様な同盟の斗いとその評価の中から、四回大会の問題がうみ出されたのかを明らかにすることである。

四回大会は、11・27から1・16斗争という同盟が学生運動において、安保斗争を徹底的に戦斗的に斗いぬき、同盟の存在が、一つの勢力として労仂者階級の中に知られ、入りはじめた時点で開かれた。

しかしこの時点で、同盟の主力をなす学生細胞は解体状況にあり、同盟の理論活動は三回大会の綱領論争以来全く停滞したまゝであつた。

しかも一方では、三月から春斗と共に安保批准阻止斗争が、労仂者階級の斗いとしてとりあげられはじめ批准阻止の四月斗争の戦術が、設定されはじめていたのであつた。

四回大会は、かゝる情勢の下で、11・27、1・16斗争の経験を客観的な日本資本主義の状況と労仂運動の状況の分析の中で正しく総括し、そして、同盟活動の理論的思想的総括を行なつて、同盟を真の党として確立するための方針を明らかにし、さらに当面する階級関係と安保斗争の意義、労仂者階級の斗争の展望を明らかにし、その上で学生運動の意義と使命を明確に把握すべきであつた。

しかし、同盟書記長は、11・27以来の斗争の総括を具体的な労仂者階級の状況の分析の上で提出しなかつたどころか、実に11・27、1・16の総括それ自身をも何一つ把握しなかつた。そしてその代りに、総括として提出されたものは、「労仂運動の右傾化の中での、全労に対する同盟の登場」という評価と、同盟のボリシエヴィキ化、権力獲得の思想と方針とを徹底的にぶちこむ」という根性の強調であつた。

ここには、11・27、1・16斗争が学生運動の斗争として斗いぬかれたことを、労仂者階級の具体的分析とそこにおける前衛党の建設の展望を抜きにして、「革命的潮流」が生まれたとして評価し、そして、11・27、1・16のような斗争を積み重ねる中で、同盟が建設できる、という思想があつた。

こうして総括の討論は、全く抽象的な「権力獲得」をめぐつて混々たる状況に陥り、しかも、戦略、思想、同盟建設の問題についての追求と検討ぬきの「労仂運動の右傾化」と「同盟の擡頭」との処置を前提とし、また結論とする情勢、方針、同盟建設論が把握され安保斗争の客観的な階級関係における性格規定が全く行なわれなかつたことは、結局安保斗争の展望、戦術に到るまでの一致を全く不可能にした。

「11・27の再現」というスローガンが、その具体的条件の検討と、戦術に到るまでの具体的追求なしに呼号され、そのような斗いさえやれば、労仂者階級の前衛党はつくられる、という理論的、思想的追求なしの同盟建設の展望が描かれだのであつた。

こうした思想から、後に検討するように、この大会において綱領才三次草案を何の検討もないまゝ廃案し、それに代る保証を何一つ与えなかつたことも生れたのである。

安保斗争における同盟の混乱と解体は、四回大会によつて決定的となつた。

（ハ）四・二六闘争から五・一九まで

羽田斗争のあと労仂者大衆の低滞と後退が続いた。総評民同は、民社の分裂策動をまえにして、「日本的労仂組合主義」を唱え、国労中央委員会における新生民同の攻撃にたいする民同革同の後退が続いた

一方、三池にたいするロックアウトの攻撃がかけられ、炭労全体の反撃も、労仂者階級の反撃もならないまゝであつた。

安保改定については、二月から衆院における審議がはじまり、四日衆院通過が公表されていた。

しかし春斗は、鉄、造船など基幹部分の強固なストライキ斗争の方針はないままであつたが、二・二五の国公の「二・一スト以来」の賃斗からはじまり、電通の七千円要求、全逓の賃斗などに示されるエネルギーを持ちつゝ全体としては、三月末から斗争に入つていた。

三・一九の十三次行動は極めて多くの労仂者大衆を結集した全国デモとして、労仂者の斗いに一つの転機をもたらした。

3・31には、東京青学共斗は、国会デモ方針を一度は出し、それは民同の圧力でぶつつぶされたが、極めて多くの動員書なしの労仂者を結集して斗われた。このことは、あきらかに、労仂者大衆の政治的関心が高まつていることを示していた。

一方、三池の斗いは、三井資本の生産再開をめぐつて激突し、右翼暴力団をつかつての虐殺にたいする怒りが、全国的に高まつていた。

しかし、春斗は、まさに安保が衆院の決戦段階に近づこうとしていた四・一五の時点で、公労協が「暁の調停」によつて斗争を中断することによつて、安保と全く切り離されて、終熄していつた。

だが、労仂者のエネルギーは、安保をめぐつて状勢が緊迫するにつれて、上昇し、解き放たれないまゝ残つていた。

一方、四月に入ると、「安保批判の会」をはじめとして、東大、東大教授その他、インテリゲンチヤの安保批准反対の意志表示が広汎に行われ、それが、中間諸階級層の安保強行採決反対の空気をつくりだしていた。これが、社会党を勇気づけ、議会戦術においても強硬態度に出ることを可能にしていた。

そのなかで、国民会議は三月には、四月下旬の「ゼネスト・国会包囲」を決定し、四月五日の幹事会でもまだその方針は、「国会包囲等」であつた。批准強行を目前にして、もはや、労仂者大衆を国会から遠くはなれたところにつれていくことは、不可能であつた。総評民同は、労仂者大衆の「国会へ行け」という要求をいれながらもいかにして完全に自己の指導のワクのなかに、大衆をおしとどめておくかというジレンマにたゝされた。十二日の幹事会で、まず共産党が、11・27の再現をおそれ、徹底的に反対するなかで、総評民同が苦肉の策として、ひねくり出したものが「焼香請願」であつた。

一一・二七以来、全学連は、斗争のなかで重大な鍵を握るものとして登場していた。4・26の国会デモにしても、全学連とともに、労仂者大衆が、11・27のごとき国会デモを斗うことが可能となるような斗争形態 [illegible] 連の戦斗的斗争を [illegible] たことは、全く正しいし、その後の斗争の展望を切り開くまで、大きな役割りを果した。

しかし4・26のバリケードをのりこえての斗いはそのように位置づけられて、前から準備されたものではなかつた。当然、四回大会で、四月「決戦」の情勢と基本的な戦術内容―戦斗的街頭デモの具体的戦術にいたるまで―の一致が得られていなければならなかつた。しかるに、そこでは、春斗と切りはなされて、生産点斗争が放棄された場合には、せいぜい、数回の街頭行動でおわるというふうにしか考えられていなかつたのである。

4・26の戦術は、直前になつてはじめて決定されたが、それも、明確な戦術の位置づけを欠いたまゝであつた。その戦術決定をめぐる論争においても、労仂者階級の全体の動向を見ることをせず、ただ国会議事の進行状況のみが、判断の基準になる傾向が強かつた。このような結果が、当日の混乱をひき起したのである。

しかも、羽田斗争のイメージによつて、安易な、労仂運動内における左翼的潮流論があつた。労仂者階級のなかにおいて、いかにして、革命的核をつくりだしていくか、という点と、労仂運動の右傾化に抗する左翼化とが、奇妙に混同されたまゝ、同盟の指導下にある全学連の斗いと民同の指導下にある労仂者の運動を対置することによつて、革命的潮流をつくりだすという思想からは、労仂者階級のなかにおいて、最後まで「請願」に反対し、戦斗的デモで斗うことも追求することなく、最初から全学連のデモに同盟の影響下にある労仂者を、ある程度「裸でも」結集する方針しか出されなかつたのは当然である。たしかにその方針のもとにおいても、例えば全〒の場合、「焼香請願」か「戦斗的デモ」かをめぐる大論争を職場で展開し、大衆的な結集をかちとつている。そして、民同、日共の指令違反の追求に対しても大衆的に反撃し活動家の結集と、其後の安保斗争の過程での影響力の拡大を果したのである。[illegible]

つては、おのずから限界のあることは、あきらかだからである。

この点が、明確に自覚されないままでの四・二六方式の固定化は、五・一九以後の高揚のなかで、労働者自身が激しい街頭デモ移つた時（五・二〇、五・二六）その中より中核を引き抜き、広汎な労働者とは別箇のところで、学生運動とともに一部の先進的労働者を結集させることとなり、この誤りが指摘されると、こんどはその裏がえしとして六・四以後においては、労働者階級にたいする政治街頭デモにたいする無方針となつて現れたのである。

労働者実行委員会の問題にしても、民同、日共の裏切りの中で戦斗的デモの組織化のためにはたしがにこうした組織が全く必要であり、それを追求する必要があつたが、それが、労働者のデモの戦斗化のための組織としてではなく、全学連のデモに参加するための組織として作られたことは、基本的に正しい方針を追求したものとは云えず、だからこそそれを五・二六以後ストライキ委に改組すると云つても、それは現実的に全く困難なものになつていたのである。

戦斗的デモが全学連によつてしか斗いぬかれていない時点で、全学連のデモに結集したことが誤りなのではなく、労働者階級の中での徹底的な追求をした上で、全学連のデモに結集するのではなしに、安易に全学連のデモと同盟の労働者とを結びつけた考え方に問題があつたのだ。

四・二六が、整然とした「焼香請願」に終つたことは、自民党とブルジョアジーに、自信をもたす結果になつた。

四・三〇、新刑法草案発表

五・四、三池仮処分発表

五・三、岸、大野、川島会談、早期批准に一致

こうして、五月中旬の批准強行は、確実となつた。

このとき、国民会議は、九日―十五日の連日動員による「請願」―四日十万人の「請願行動」の繰り返しを提起したにすぎなかつた

しかし「焼香請願」にたいする不満は、労働者大衆 [illegible] かつて高まつていたのであつたから、五・一三にむかつて、民同、日共の「焼香請願」という戦斗型態に立される敗北主義を徹底的にバクロし、ストライキと戦斗的デモを追求する方針が正しかつた。

事実、都教組大会、全〒等において国会デモの要求をもつて大衆的に激しい論争が行なわれたことは、それをはつきり示していた。

その時点で、学生運動においても、四・二六の巨大なエネルギーの発揮の上に立つて、批准阻止のストライキとくに戦斗的デモの方針が同盟の完全に一致した方針として確認されねばならなかつた。

しかし、事実は、五・一三の突入斗争の方針は、一度は決定されながら論争の中で二転三転し、遂に同盟全体が、明確な型でその一致と具体的準備をなし得ないまゝに、五・一九を迎えたのであつた。

それは「国会構内集会」という大衆化のスローガンが誤つていたという理由からも生じた混乱だつた。

しかし、その理由は、四・二六の準備の中であつた問題、その戦術が、安保斗争の性格と労働者階級の具体内状況の分析とそこにおける学生運動の任務を明確にする、と云う形では立てられていなかつたことから生じた不一致が、根本的には解決されないで、五・一三の戦術が提起されたことにもあつた。

五・一三の戦術をめぐつて中央委でも討論された。しかし、安保斗争の性格と階級関係と、そして具体的な労働者階級の分析と、方針とが明確に一致させられた上で学生運動の方針を追求すると云う討議よりも、学生運動にどれだけ労働者が一諸にやるのか、という観点での討議だつた。

その点では、同盟の現実の力量からして、極めて限られたものであることは事実であり、そこからはどうしても確信ある徹底的斗争の方針での完全な一致が得られなかつたのであり、労働者階級の前述の状況の中での、学生運動の意義を位置づけ、五・一九の突入斗争が追求されねばならなかつたのである。

突入斗争と、国会構内集会をめぐる論争と同盟内の動揺は、この決定的段階で、次の斗争にたいする明確な意志統一と準備を怠たらせた。このたちおくれと混乱こそ五・一九の決定的斗争を無為におわらせた最大の原因であつた。そして衆院において批准が強行されるのを無為にすごしたくやしさは、それによつて、どれだけの大衆的憤怒がまきおこるかを忘れさせ、次の斗いにたいする展望を欠いたまま、同盟内に、敗北感を拡大させていつた。

（ニ）五、一九―六、二二

五・一九深夜から、五・二〇未明にかけての、自民党の安保衆院批准、会期延長強行突破という暴挙は、労働者、小ブルのエネルギーを一挙に爆発させる導火線となつた。

この日、労働者、学生は続々とつめかけ、大衆の痛切な危機感を背におつて、民同指導部自身が、請願をふみこえて、国会周辺デモをせざるを得なかつた。

だが、深夜の警官導入と強行採決とは、民同、社会党の大衆の怒りを極端に誘発させない「巧みな技術」―すべてを事後に明らかにするやり方は、大衆の怒りの爆発をおくらせた。

同盟は、前述の様な一致した準備の不足と、当日の [illegible] らわれた戦斗的なものであつた。

しかし、安保斗争の全過程を通じて、大衆がもつとも憤激し、昂揚をみせようとしていた決定的な時点で同盟政治局は、この状況を正しく把握し、斗争の展望をまつたくあきらかにしえなかつた。

せいぜい、ゲリラ戦的斗争の若干の継続としてしか評価できず、安保斗争は基本的には終つたという判断にたつたのである。

まさに、このときに必要だつたことは、自然発生的に大衆みずからが、斗いに立ち上つた事実を、その意識状況をもふまえて、正確に把握し、その大衆のエネルギーに、明確な方向づけ [illegible]

自民党の警官導入による強行突破にたいして、全学連の部隊によつて、それを直接的に阻止することにすべてをかけがちの思想にあるといわなければならないだろう。ここでは、背後に存在する大衆の政治的動きが思考からぬけおちてしまつているわけである。このことは、当然、全学連の部隊が、実力で自民党の強行突破を阻止できなかつたくやしさが、ただちに敗北感につながることをも説明する。

五・一九を無為にすごすことなく、全学連の戦斗的な斗争があつたならば、その夜を期して、自然発生的に大衆が斗いにたち上つていつた実際の経過よりも、さらに激しい、しかも、もつと明確な目標をもつた大衆の昂揚をつくりだしえたであろう。しかるに、実際には、全学連の斗争が契機となつて、大衆がいかなる政治的反応を示すのか、という点について、明確な判断、なされないまま、「突入戦術」だけが、論議される傾向があつたのである。したがつて、明確な展望もなく、そこから、真に確信をもつた斗争を斗いぬきえなかつたのである。

五・一九以降の大衆の昂揚について、不正確な評価しかなされない事態は、六月に開かれた中央委員会においても、克服されなかつた。

そこでは、五・一九以降のたちおくれにたいする自己批判的総括がなされたが、せいぜい、「日本資本主義の脆弱性」などが、問題としてあげられたにすぎず、具体的な政治的過程にまで及んであきらかにされることがなかつた。

五・一九を見送り、その後の情勢評価に決定的にたちおくれた同盟は、五・二六の指導においても明確な方針もなく、岸を国会内に残して早々に、デモを散いてしまい、また労働者大衆の指導においては、四・二六のイメージをひきつづきもちつづけ、実行委を結成し、労働者大衆の戦斗的デモを別なところで、同盟の小部隊を結集するということしかできなかつた。その結成された実行委の性格もあきらかに労働者大衆のな [illegible] 時からは、完全に電車を動かした。民同は、七時から電車を動かすことに積極的に協力したのであつた。一部の労働者の主張した「岸内閣を打倒する」ストは「世論を喚起する」ストのワクをのりこえて実現されなかつた。

六・四ストにむけて同盟は、四・五月段階の持続的な生産点工作を欠き、決定的なたちおくれを示しながら生産点における資本との対決こそ、斗争の新なる展開のかぎであることもあきらかにし、労働者階級のストライキを中心において、それをいかに戦斗的ストライキに転化もせるかを追求した。国鉄・全逓におけるこの追求は一応の成果をあげた。

しかし、このとき、生産点斗争の強調の中で戦斗的街頭デモを最大限に追求することを放棄する傾向が生れた。労対においては、依然として、学生運動のあとにくつつけるデモしか考えられなかつた弱さは、労働者同盟員をデモの本隊から切り離すことが、戦斗的デモの内部からの指導の放棄しか意味しかなくなつたこの時点で、あきらかになつた。この時、街頭デモ軽視の傾向と重なつて、労働者大衆内部でいかにデモを戦斗化していくのか、という点についての組織的指導が放棄されていた。

労働者実行委員会はストライキ委員会へ転換するという一般方針の下で解散されたが、しかし、ストライキ斗争をどの様に遂行するか、の具体的方針も提起されず、一方、戦斗的デモ自体の追求も放棄されたのである。

この点はまた、安保斗争の全経過を通して一貫してあつた一つの傾向、安保斗争を、自分の職場の労働者の具体的条件の中でとらえかえしてみるという過程をぬきにして、当面の指導部の動向から導かれる戦術面だけに限られて論議が行なわれるという問題とも関連している。

もしそうした追求が行なわれていたならば、提案がこのように揺れ動くことはなく、また五・一九以降の情勢にしても、もつと明確に早く把握されたであろう [illegible]

で6・17と6・15に設定し、6・4を上廻るゼネストにすることを決定しながら、公労協のストを実質に骨ぬきにすることによつて、自民党にたいする対決の鋭鋒をくずしていつた。かれらは、あきらかに意識して後退を開始したのである。

批准を絶対に阻止するかまえから一歩後退しながら斗争の焦点は、アイク訪日阻止にうつされ、十八日の自然成立を前にした倒閣斗争は大きく後退させられたのである。論争はもつぱら十九日の羽田デモをめぐつて展開されていつた。

この斗争は、労仂者階級の戦斗的力量を日共が単独で引出した点において運動の指導権を大きく日共に握らせることによつて、その民族路線を大衆化し、アイク訪日阻止への傾斜を決定的にしたのである。

十日のハガチーデモはその傾向を決定的にした。

このなかで自民党は、民社党をひきこんで、「政治休戦」を実現し、アイク歓迎の体制をつくりあげようとし、それに対決する自然成立まえの斗争は、目標が与えられないまゝ停滞していた。連日デモは続けられたが、労仂者大衆は、決定的な斗争方針を与えられないまゝに放置されていた。

この情勢のなかで、6・4ストのあと、政治局は、全体として、明確な方針をうちだせないまゝ、貴重な時間を空費した。

このような混乱のなかで6・15にたいする具体的な戦術における方針の提起と意志統一は、その直前までのばされ、最後まで、全同盟あげての体制はできあがらなかつた。その結果、労仂者同盟員にあつては、事後になつて始めて国会突入斗争を知るという事態が生じたのであつた。

六・一五、暴虐の限りをつくして襲いかゝる権力によつて、一人の同志の生命を奪われ、おびただしい血を流しつゝ斗われた全学連の英雄的な斗いは、斗いの局面を一変させた。樺同志の虐殺にたいする怒りは、広汎な大衆をとらえ、岸にたいする怒りは、「岸を殺せ」というシュプレヒコールとなつて大衆の口からほとばしり、急角度に上昇した。それまで焦点になつていた一九日アイク訪日は、後面にしりぞき、ふたたび焦点として岸内閣の倒閣が前面におしだされた。

六・一五斗争は岸退陣を決定的なものとし、アイク訪日を中止させた。

六・一五弾圧によつて誘発された労仂者大衆の昂揚は翌日からの雨をついての、膨大なデモとなつて爆発し六・二二倒閣ストを、「世論を高める」式の民同ペースのワク内であつたとはいえ、急速にもりあげていつたのであつた。

労仂者階級の政治的昂揚は連日の激しいデモとなつて爆発し、六・二二倒閣ストとなつて発展していつた。

都内主要大学は、完全にその機能を停止し学生大衆の昂揚は、戦後最大のものとなつた。このような政治的昂揚のまつただなかにあつて、同盟中央は、その政治指導をまひさせ、次の斗いの展望をなんらあきらかにしないまゝ、その政治的無指導を極点にまで達しさせた。そのもとで、同盟全体として空前の大衆的昂揚のなかに埋没していつたのである。

つづく6・18にたいしては、単に一般的に戦斗的街頭デモという目標をかかげるだけで、それを具体的に保証することを放棄した。左翼化した中小企業の労仂者のなかには死を覚悟して国会に来た者すらあつた。多くの労仂者は、全学連を「支援し」にあるいは、何かを「期待して」国会周辺にやつてきた。

だが、それにたいし、何らの政治指導もないまゝ、それを放置したのである。

このような事態をまねいた最大の原因は、6・15によつて生みだされた政治的昂揚を、正確に評価し、明確な展望をもなんらあきらかにしえなかつたことにある。

6・15以後多くの労仂組合において、割あて動員のワクをはみだし、圧倒的な労仂者が、自発的にデモに加わつたが、全体としてこれのもつ高揚の大部分は小ブル層であり、労仂者階級の底辺にまでその階級の昂揚が及んでいなかつた点をはつきりさせる必要がある。職場できびしい支配のもとにある労仂者大衆の決起が、小ブル層よりも遅れるのは当然である。この条件を、あの時点で、変えることができたか、いなかがあの政治的昂揚の性格を、民主主義的な、小ブル的なワクから、労仂者的性格のものに変えることができたかを、決定する。あの時点では、岸の暴政にたいする政治意識の一定の昂揚はありながらも、労仂者階級のおかれていた経済的政治的条件の総体は、あきらかにこの政治的昂揚に一定のワクをはめる客観的条件をなしていたのである。

そのうえ、さらに、組合機構を通じての民同の強力な統制と、日共の影響がかなりの活動家をとらえている状況のなかで、わが同盟の大影響力が労仂者大衆のなかにおいて決定的に少ないという主体的条件もあつたのである。

目的意識的努力を強調するあまり、このような客観的条件を無視し、階級決戦論を主張するにいたつてはそれはまつたくの主観主義というほかはない。

しかし、そのことは、大衆的小ブル的洪水にみずから埋没したことの合理化であつてはならない。「挑発にのるな」と繰り返し「アジり」、右翼的傾向を助長するごときことなど決してなすべきではなかつたのである。

われわれの一貫して追求すべきだつたことは、このような大衆的小ブル的洪水の事実をふまえ、しかし、それに拝跪するのではなく、どうしたら、一歩でも、ブルジョア民主主義的、小ブル的ワクをふみこえさせるかを具体的戦術においても追求することでなければならなかつた。例え現地の状況で突入斗争が困難であつたとしても首相官邸にいる岸にたいして最大限の怒りを爆発させるためにあの混然たる意識内容をもつた数万の大衆を革命的デモに結集すること、そして午前〇時の自然成立前に、一斉の最大限の抗議行動を展開することを最後まで追求しなければならなかつたのだ。

6・22斗争が、はじめての倒閣政治ストライキとして大きな意識をもちながらも、「世論を高める」斗争としての性格から、脱し切れなかつたのは、それを指導した核が労仂者大衆のなかになかつたこと、さきに指摘した斗争の性格を規定する客観的条件のためであつた。

その翌日、岸は批准書を交換し、新安保条約を成立させたのであつた。

それに岸の辞職がつづき次に首班として誰を登場させるか、という自民党内の争いが、大衆斗争の急速に後退するなかで、続けられていつた。

（三）斗争のつくりだした新しい状況

六月二十三日の批准書交換をもつて、終止符を打たれた大斗争は、階級関係にいかなる変化を与えたであろうか。

六・一五斗争を焦点とする大衆的昂揚は、アイク訪日を中止させ、批准書交換とともに岸の退陣声明をよぎなくさせた。この「東京における暴動的事態」と、アイク訪日中止は、日本労働者階級の力量を示し、日本の階級支配が決して強固に安定したものでないことを万人の前にあきらかにし、かれらの「国際威信」を甚だしく傷つけた。

だが、ついに安保条約批准を阻止することは出来ず、岸内閣の政治生命というあまりにも小さなものを奪つたのみで、後述する多くの新しい潮流の萌芽をつくり出し、労働者階級が政治斗争の経験によつて成長したとはいえ、資本に対する階級的反撃の橋頭堡を獲得することも出来得ずに終つた。

三度にわたる政治ストと、広汎な労働者、小ブル大衆の政治斗争への参加を誘発し、傷つきながらも、彼等は帝国主義者としての新らたな支配体制の確立を、安保批准によつてとにかくなしとげたのである。

警職法斗争のときには、今度よりも小規模の労働者階級の政治ストと小ブル層のかれらからの離反によつて、われわれは、これを阻止することができた。ところが、安保斗争においては、ブルジョアジーは、警職法斗争をはるかに上廻る政治的昂揚をまえにしながらも最後まで、安保強行突破についての原則的な意見の一致のもとに、それを貫いたのであつた。かれらは、岸内閣にいかに政治的傷がつき、小ブル層の離反をまねこうとも、安保批准の挫折によつて生ずる「国際信用」の失墜、なかんずく日米関係の危機と、国内における大きな政治的後退よりもむしろ岸内閣の政治生命とひきかえに、安保批准を成立させることをえらんだのである。

安保批准の挫折という政治的敗北とそれに伴う大きな政治的後退が、ただちに、経済政策の破綻とそれによつてひきおこされる経済的危機を誘発すると速断することは、もちろん正しくない。だがそれが支配階級の国際的位置を不安定にさせ低下させ、国内において労働者階級の反抗をより激しくする可能性をつくりだしたことは確実である。だが批准の完了が斗争に終止符をうち、流動した階級関係を急速に回復させるものとなつてしまつた現実の下で、「われわれはなぜ、安保批准を阻止できなかつたか」をもう一度検討してみなければならない。そのうえに立つて、われわれは新らしい階級関係のもとでの斗いを追求して行くのだ。

資本家階級が、警職法とは比較にならぬ攻撃の中でも、強行突破について原則的な一致のもとに批准を貫いたのに対し、労働者階級はついに一度として『階級』としての反抗をこれにぶつけることはしなかつた。五・一九、六・一五の昂揚のなかで、春斗においても立上れなかつた国鉄、炭労の政治ストを中心として、労働者階級の統一政治斗争の中心部隊となつたのではあるが、最後まで基幹大産業の労働者を生産点斗争の中核部隊として決起させることが出来なかつたし、また「ゼネスト的政治スト」を「世論を高める」ストのワクから一歩もはみださせることができなかつた。五・一九以降、さらに六・一五斗争によつて誘発された大衆的昂揚も、小ブル層、学生、そして中小単産労働者が中心であつたのであり、五・一九以降の昂揚が、第一章で明らかにした民主々義運動としての限界にとどまつたことこそ、敗北の主要な原因をなしていたのである。

もちろん、そこには五・一九以後の同盟の革命的学生運動指導の中にあらわれた右翼的傾向をも含め、民主々義運動小ブル運動としても、徹底的に推行されなかつた誤りが、大きく働いていることを、いささかも合理化することは出来ない。社会党が議会の党として、最高度の戦術である議員総辞職を放棄したのを追求するのと同様に、六・一八をふくめて、同盟の学生運動の指導の混乱を、それ自体追求されねばならない。だがそのことから逆に、安保斗争の総括をすべてそこにもとめるのでは、小ブル急進主義としての前進しかあり得ないで、この敗北をもつとも根本的に打破する革命への展望は生れてこないであろう。

さらに、第二章で明らかにしたごとき日共や、民同の裏切りがなければ、斗争はこうした経過はたどらなかつたことは明らかである。しかし、それをばくろし、斗つて行くわが同盟の影響力が微々たるものであり、また有効にそれを展開することをわれわれが行い得なかつたことに加えて、なおかかる裏切りを許している客観的条件が、労働者大衆の中に強固に存在することを正しく見つめることなしに、「経済決定論」の一言をもつてこの検討を否定することは、かえつてわれわれの革命的情勢とこれら諸潮流を打破せんとする意欲を安易なものにし、前衛建設の方向を誤るであろう。

※　※　※

安保斗争は、労働者をはじめ人民に、偉大な政治斗争の経験をのこした。それは、斗争の中で具体的な物質力となることにはついに成功しなかつたとはいえ、労働運動内部の諸潮流の再編に重大な契機をつくりだした。われわれが安保斗争の総括を行なう中から革命の展望として前衛党建設の課題を追求する時、このことこそ最も重視し活用すべきものである。

四月から六月にいたる安保斗争の昂揚は、それまで右からの反撃におしまくられていた総評主流―民同をたち直らせた。民社党の発足とともに、全面的に激化した全労の分裂工作のなかで、「日本的労働組合主義」の方針を発表し、二月の国労五十四回中央委における新生民同への無条件降服といつた立場は、大きくかわり、民社ブームの現出を阻止し、総評―社会党の権威を高めた。

この事実をふまえての一定の自信が、安保斗争後の国労大会において、民同そして新生民同にたいするに、公協の終始にかわつて、これをつき放なさせたのであつた。

しかし、これをもつて、一概に労働運動が左傾化したなどという結論を下すものがいるとすれば、それはまつたく誤つている。

全労は、この間も、労働組合内部において、一貫して、分裂工作をすすめているし、それは、国労における大阪地本新生民同の脱退、社鉄の産業別組織の結成、東電、北海道電の全労加盟による電労連の全労加盟の完成、宇部窒素の分裂、等々となつてあらわれている。

とくに、三池における敗北は、ある意味では、安保斗争以上に、これからの労働組合運動にたいして、決定的な影響を与えるものであつた。これは太田、岩井ラインが、総評主流となるにあたつてかかげた産業別統一斗争と職場斗争の最大最強の拠点の喪失を意味したのである。

こうした事実は、安保斗争がただちに今後の労働運動の再編のきめ手となり、政治的評価が総評の左傾化などにみちびいたのではなく、その底辺において、もつと別なかたちで除々に再編が進んでいることを示している。（稿を改めて検討するが、三池斗争の敗北さえも、それが直線的に全職場での左派の崩壊をもたらすものではない）

だが、いかに民主々義運動として、小ブル思想にとらえられていたとはいえ、職場で労働者大衆を煽動し組織して斗つた活動家は、安保斗争の中で、急速に成長した。（三池斗争の場合は、はるかに質的に高度なものをこれに与えている）これが、全労、新生民同らの攻撃に対して、まつこうから、は向つているのであり、民同は、これにのつているといえるのだ。

日共が口を開けば讃美する全国二千余の共斗組織についても、これがいわゆる地域の、没階級的な構成であり、思想的には、日共路線の独り舞台であるとはいつても、それは地区労を中核に、地方の労働者の戦斗的分子を中心につくられ、安保斗争のいくつかの局面において、民同、社共に左からの批判を加えた原動力であることを見なければならない。こうして、安保斗争の中で「さらに三池斗争で」つくられた活動家の力は、全労、民社の右からの攻撃と対立する潮流を、大きく形成しているのであり、三池斗争の敗北においてもなおそれを消すことは出来ないのだ。

合理化反対の職場斗争が安保のエネルギーを引出し、今日ふたたび職場での斗いのテコになつているのはこれによるのである。

だが、この潮流は、どんな思想によつて指導されているのだろうか。

第二章で見たごとく、日共は安保斗争の中で自からの党の純化と拡大を自己目的に追求し、労働者大衆の中で、一定の成果をおさめている。総評大会をはじめ、各単産大会における討論でも明らかなごとく、いわゆる革同派はほとんど分解し、民同社会党に対し、日共が公然と反対派として登場してきている。

しかも、未だそれは民同に代るものとは云えぬまでも、下部組合機関をにぎり社共両党支持とアメリカ帝国主義との斗争を要求する公然たるフラクションとして大きく進出して来ていることを、冷静に見なければならない。

だが、安保斗争のなかにおける裏切り、とくに一一・二七、一・一六、六・一五における反革命の役割は、インテリゲンチャを中心とした党員に動揺を生みだし、労働者細胞の最もすぐれた部分（われわれから見てであり、彼等にとつては〃脱落者〃にすぎぬが）の分離を促進している。これは党外大衆の間でも一般的に生じている傾向であり、日共にたいする不信は、かつての産別や火炎ビン時代とはちがつた、新らしい形でかなり一般的なものとなつている。

これを受けて、一方では社会民主々義の勢力拡大の新しい方向として、あるいは無党派戦斗分子の結集点として、いわゆる民主々義者の結集として、さらに日共の路線からはみ出た構造的改良派の接近によつて、社青同をはじめとするさまざまな潮流が生れている。

ここでは、組織的、戦術的に日共、民青への対立となつてはいても、そのスターリン主義の影響を大きく受けていることを見なければならない。

ここでとくに注意しなければならないのは、こうした「斗う」潮流内部における日共に対する批判的潮流の合頭は、わが同盟を抜きにしては語り得ないことである。日共批判が、すべて日共とわれわれの斗争の結果として生じていることがその何よりの証左であり、同盟の、特に革命的学生運動の安保斗争における役割をはつきり示すものである。

だがそれにもかかわらず、これを同盟の指導のもとに、同盟を中心とする強力な潮流に組織しえず日共批判の潮流を民主々義的潮流のなかに埋没させているところにも、同盟の危機の一つがあらわれているのである。労働者階級の中に生れ、斗いの中で生長すべき部分を、はつきりと革命の思想で武装して行くための、われわれの体制を急速に確立する必要が、改めて痛感されるのである。

なお、現在同盟内部に存在する若干の見解として、同盟の日共、民同に対する方針を対置することによつて、独自の革命的労働運動が展開出来るかのごとく錯覚し、独自の労働運動を強調するものがある。

だが、ここにのべた多くの潮流も、それはまだ大きくは民同の組合機構と、資本家からの職場における力の内部で、その底辺で動いていることを、事実としてみなければならない。安保斗争の中で、例えば羽田デモが、11・27以後の昂揚をうけながら労働者大衆の運動としてついに実現しなかつたことは、労働者の意識水準もさることながら労働運動を大衆運動として展開するうえで、いかに既存の組合機構と資本の鎖が大きな力をもつているか、いいかえればそれを打破るためには、われわれがいかに強力な部隊を、労働者大衆の中に確立せねば、革命をなしとげることは出来ぬことをはつきり見せつけられたものであり、その点で日共と斗うことにおいてこそわれわれは敗北したことをかみしめねばならない。このことのうえにたつて、われわれはこれを打破する力を見なければならないのだ。

×　×

岸の退陣表明後、大衆的昂揚が、急速に退潮にむかうなかで、みにくい派閥争いのゝち、ブルジョアは、池田政権を成立せしめた。

岸の退陣表明によつて退潮にむかつた運動の弱さ、大衆斗争で直接岸をぶつ倒すことのできなかつた弱さが、池田政権とそのもとでのかれらの政策の展開を容易にした。

かれらは、三池斗争をあつせんにもちこみ、総評民同に助けられつゝ三池斗争を圧殺することにより、労仂運動の将来を左右するほどの重要性をもつ天王山において勝利をおさめ、かてくわえて小ブル層の関心をたさつけることに成功した。

かれらの現在、追求しているものは、選挙をまえにして、小ブル層の関心をひきつけつゝ、選挙によつて強力な政権をつくることであり、それと同時に、すでに、いつたんひきだした社会保障を犠牲にしても、公共投資に最大の力点をおいているところからも、はつきり、うかがうことができるように、安保批准という橋頭堡のうえにたつて、積極的な合理化策を展開し、貿易為替の自由化を展開しつゝ、各産業における合理化を遂行することにある。

いまわれわれにとつて、なさなければならないことは安保改定の背景となつた日本資本主義の構造を正しく把握しその中での池田内閣の政策を、具体的にあきらかにし、それを政治的に暴露するとともに、各資本にたいして労仂者大衆が、いかなる斗いを迫られているかを具体的にあきらかにすることである。

われわれは、この点について、三池斗争の総括と、その後の労仂運動の状況をふまえつゝ、稿をあらためて全面的にあきらかにして行く作業を開始している。すでに九・一五斗争を中心に、全国各地で加えられた池田遊説に対するデモをはじめ、人事院勧告にもとずく賃金斗争を皮切りに、新らしい斗争の波は動きはじめている。われわれは、この中で労仂者階級を革命に向けて鍛えるために、正しい方針を打出して行かねばならない。

そのためには、安保斗争の中でわれわれが得た最大の教訓――同盟中央の解体を、いかに克服して行くかを検討せねばならない。

四、同盟の欠陥と前衛党建設への課題

同盟の危機の本質は、すでに語られているように、小ブル急進主義の党として結実化してきたところからくる危機そのものである。

それ故に、われわれが同盟創設時には、予期もしなかつた、かかる事態をひき起した党建設上の基本的弱点を明るみに出し、その底にあるわれわれの思想と理論に検討を加えることによつて、同盟再建の課題を明確にすることが必要である。

階級斗争の必然的結果として労働者階級の前衛党が確立され、革命が達成されるということは、確かに、客観的歴史的過程としては全く正しい。

しかし、そのことが、主体的契機ぬきに把えられるときには、誤りに転化する。なぜなら、それは、誰がいかにして革命を行い、またそのために、前衛党を建設するのか、ということが全く抜きになり、革命は労働者階級が行うのであり、そのためには、前衛党が、必要であるということが教条（マルクスやレーニンが「いつたから」）的にいかに強調されようとも、決して問題は片付かないからである。

このことが全く正しく理解されていないが故に、安保斗争の中で、労働者階級の前衛党の建設をめざす同盟が学生の戦斗的斗争によつて、外から労働者階級に影響を与え、労働者階級を革命化（？）することに主要な力をそそぎ、われわれ自身を真に革命主体として変革する、思想的理論的努力は殆ど放棄され、しかも斗いの中で労働者階級の確固たる革命的中核を作り上げる努力も、全同盟的活動として意識的に遂行されなかつた。

このことの具体的指摘は三章において行つたのでここでは繰返さない。

このことは、四回大会において、「権力獲得の党」ということが、全くその具体的内容なしに、提起され、「三千人の革命的前衛がいたならば、権力を奪取できる」ということが、責任ある立場の同志から真面目に発表されたことと無関係ではない。たしかに、労働者階級は革命において、権力を奪取しなければならない。だが、革命がいかなる内容のものであり権力奪取を何故、いかにやるかが明確にされていたならば、「三千人……」のブランキズム的傾向の濃厚な発言はなかつたであろう。

このような考え方から、権力奪取が革命の内容から切離され、労働者階級の解放が、労働者階級自身の行為たるべき必然的関係が全く等閑に附されることにならざるを得ないのである。

また労働者の中核部隊に確固たる前衛を作り上げる努力にかえて「われわれが直接指揮しうる部隊をもつて」しても、当然政治危機にまで発展させられた斗争を挫折（挫折が敗北と変えられても、本質的な変化はない）させてしまつた大きな要因をなす――という東大の諸君の安保総括と、そこから出る三池学生投入論などとの実践的類似性を見出すことになるのである。

われわれは、プロレタリア革命の達成は、労働者階級を革命のために指導する真の前衛なしにはありえないことを知つていたが故に、本同盟を創立した。スターリニスト（共産党）と社会民主々義者（日本においては社会党・民同）は労働者階級の真の解放の道を見失ない、資本主義打倒の道、解放をおしとどめている。

われわれはこのことの確認にもとづいて（これがいかに確認されていたかが問題だが、それは一応おいて）、同盟を日本におけるプロレタリア独裁の樹立と、それを通しての世界革命の達成を実現するための、真のプロレタリア政党、前衛党の建設をめざす革命的組織として創立したのであつた。

そして形式的には同盟を革命的前衛たらしめるために必要なすべてが提起されながら、整備されてきた。にもかかわらず安保斗争の結果は、同盟の解体的危機をもたらした。なぜこのような事態が起つたか、それを原則的に解明することをしなければならない。

（一）、まず第一に「革命的理論なくして革命的実践はない」のであつて「革命的」実践から革命的理論が直接に生まれるのではないことを確認せねばならぬ。まさに党が革命的実践を遂行するためには、その党の革命主体への、たえざる意識的変革が系統的に行われなければならない。しかもマルクス主義の創生期も恐く、現在の如く永年にわたるスターリニズムの害毒が、強力な中ソの物質力を背影に大々的に流され、それこそがマルクス主義であるかのような状況が現実にあるとき、そのことはいくら強調しても強調しすぎることはないのである。

考えても見よ。われわれ自身がスターリニストであつたではないか。われわれ自身がどこまでこれと思想的に理論的に斗い得て来ただろうか。この主体的変革は、容易なことではないのだ。しかも、これに加えて、資本主義社会の中にあつて、たえずブルジョアイデオロギーの攻撃にさらされているのである。

このような主体変革の努力は、思想的、理論的追求と実践を通して行われなければならない。これは、中央における系統的追求の組織的保証と、全同盟細胞に至るまでの系統的学習および労働者大衆に対するたえざる理論的啓蒙宣伝活動として行われねばならない。

だが、現実はどうだつたろうか。

中央における理論的追求の組織的保証は全くなく、雑誌共産主義は個々人の努力の結果として殆んど個人論文の発表の手段と化していたし、同盟全体にたいする学習指導は、殆んど系統的になされなかつた。

革共同との論争から三回大会とその前後の綱領草案作成とその検討の期間は、あるていどそうした努力がなされていたといえるが、その後は、安保斗争の中で大衆斗争に埋没し（これは大衆斗争を否定したり軽視するために云うのではない。党の必要性を追求した個所でふれたように大衆斗争の革命化の方針だけでは労働者階級の真の革命化はかちとれず、大衆斗争自体も、安保斗争の中で明らかなごとく、その方針を革命的に貫き得なくなるのだ）、その努力が全く放棄され、左翼行動主義団体化してしまつたといえる。

このような、同盟自体を革命主体に鍛えるための努力、理論活動の不徹底さが、安保斗争の中で小ブル急進主義を結果し、同盟中央のあつけない崩壊による同盟建設の一時的挫折を招来したのである。

日和見主義的潮流からの組織的分離は、理論的抉別の出発点の獲得にしかすぎないのであつて、われわれの理論の革命化を意味するのではない。このことの自覚の欠如あるいは軽視が、同盟の理論的発展への努力の中断を結果したのである。

ここから理論がプラグマチックに実用化され、都合のよいものを何でも利用するといつた理論における客観主義が生れる。たしかに既成の理論は批判的摂取の対象であり、これなしに豊富な理論を生みだすことは出来ない。だが、それはまさに批判的摂取であつて、われわれ自身の論理によつて一貫してなされねばならないのに、そうしたものが追求されていなかつたところから、労働者階級の中に同盟を建設するといつても、実際にはそれが行われなかつたのである。

一例をあげれば、四回大会において第三次綱領草案は「歴史的使命は終つた」として廃棄され「新らしい綱領の作成が提起された。だが、革命党の綱領は、あるべき党の綱領として、革命の基本的性格を明らかにし、その戦略の研究を行うものである。それが現実に不十分であり「歴史的使命は終つた」とするならば、なによりもそれを作成したわれわれ自体の限界性を明確にしなければならない。それによつてこそ、不十分な綱領しか作り得なかつた欠陥をのりこえることが出来、今後どのように綱領を作成するかが明らかにされるのである。さらに、綱領作成のための組織的な保証も何ら提示されなかつた。こうしたことにこそ、同盟の理論に対する客観主義が現われており、革命党が理論を無視した時その生命を終る運命のもとに、同盟の危機がおとずれたのだ。

これが同盟活動の弱点の一切を規定する第一のものである。

（二）第二に、われわれは同盟組織のうえに中央委員会を選出し、同盟の中枢としての政治局をもつた。まさに同盟政治局と中央委員会は、同盟の理論的、政治的、組織的中心であり、それは単なる戦術指導の中心ではないはずであつた。たえず同盟全体の理論的強化に留意し、とくに政治新聞を通じての革命的宣伝、煽動活動を通じて同盟員の政治的訓練と労働者大衆の革命化をはかりつつ、その中で現実の階級斗争に適格な方針を提起し、その推進の中で同盟の強化をかちとらなければならなかつた。

だが、同盟中央は、安保斗争の過程では理論的発展の留意は殆んどなされず、また政治的宣伝煽動の中心であつたともいえない。中央は、こうした問題を通じて労働者階級の中に強力な中核を作るということが意識されていたにもかかわらず、学生運退の戦斗化と、それによつて労働者階級に外から影響を与えるという方向を、同盟の主要なものとして終始し、労働者階級の中に同盟を確固として築きあげることは「労対」の活動として倭少化されてしまつていた。さらに、四・二六以後斗争の昂揚化につれて学生運動がピンチになつたからと労対のメンバーを次々に引きあげ学生運動に投入して行つたことにも鋭く表れている。

学生運動のヘゲモニーを同盟が握り、それ自体を戦斗的に展開することは絶対に必要であり、それが同盟建設の強力な武器の一つになることは何ら間違つてはいない。戦後日本学生運動の革命的伝統を守り学生大衆を明解な政治斗争に立上らせ支配階級に反抗する巨大な物質力とする学生運動の指導をなし得るのは、われわれをおいてはないのだ。

だが、このことから同盟建設の武器として同盟がこれを正しくとらえ、労働者階級の党建設の問題を真剣に追求するのでなく、学生運戦斗化させるだけだつたこのことが、労働者階級の状態の具体的な分析のうえに、労働階級に対する方針を提起することを同盟全体の中心にすえることが出来ず、革命的学生運動のエネルギーを、本当の意味で有効にくみとり得なくしてしまつた。

さらに、同じ考えに規定され、大衆運動としての学生運動以外の、もう一つの重要なる革命家の任務である革命的インテリゲンチャの育成においても、学生の中に強固な同盟細胞を築きあげ、将来的なイデオローグ、職業革命家からして基幹産業へ送りこむべき中核としての革命主体の育成の任務が放置され、学生運動の戦斗化（それも主体的な階級関係の分析と切離されたままで）ですべてが解決されると考えていた。いわゆる全学連主流派フラクションとしての、大衆的活動家集団となつてしまつたのであり、逆にそれが学生運動自体にも大衆的な小ブル的潮流に敗北するいくつかの苦汁をなめさせたのだ。

このような同盟活動の指導の結果、同盟は安保斗争の中で労働者階級の前衛への建設に失敗し、危機に陥つたのである。

これが、同盟活動の基本的欠陥の第二点である。

（三）第三に、同盟は、全国的に強力な政治的組織をつくりあげるために、全国政治新聞「戦旗」の週刊をかちとり、関係諸同志必死の努力をもつてそれを守り抜いてきた。

だが「戦旗」は、同盟の真の組織者として、有効な役割を果してきたであろうか。

政治局の任務は、戦旗を中心とした政治的宣伝煽動と、それを通じての政治的教育を行いつつ、労働者階級の斗争に明確な方向を与え、その中で同盟を労働者階級の党として強化することであつた。

だが「戦旗」は、ほとんどが行動への呼びかけに終り、ブルジョアジーの具体的バクロ、あらゆる日和見主義的潮流に対し系統的な批判をあびせ、労働階級をブルジョアイデオロギーとあらゆる日和見主義思想から奪う努力は極めて少なかつた。これは単に「戦旗」の紙面を利用しなかつたからではなく、同盟中央に、そうした方向が極めて欠除していたことの忠実な反映であつた。

こうした系統的な宣伝煽動が、労働者階級自身の具体的経験を通じて行われなければ、プロレタリアートをブルジョアイデオロギーやスターリニズムから解放することが出来ず、いかに一時的に戦斗的な斗いが展開されようとも、革命党の建設も革命の達成もおとぎ話にすぎなくなる。

同盟の建設と、その追求の中での労働者階級の革命的変革の意識的系統的努力を追求することがないところに、小ブル急進主義的傾向を可能にし、また小ブル急進主義的傾向があつたからこそこうした欠陥が平然と通用し、同盟建設の基本的欠陥をなしていたといえるであろう。

同盟再建の基本的課題（完）

あとがき

同盟五回大会以来、すでにかなりの日数が流れた。安保斗争の総括のうえに、新らたな飛躍をとげるべきはずの五回大会は、戦術指導をめぐる追求にとどまり、同盟中央が討論を指導することさえ出来ずにおわり、同盟中央は解体したまま、同盟全体の危機を一層深化させるのみであつた。

その間、池田内閣の成立と、三池斗争の敗北をめぐる息づまる情勢を経て、今や池田内閣の新政策のもとでの総選挙カンパニヤと、その下での新らしい階級斗争の動きが、休みなく続いている。われわれは安保斗争にかけた巨大な犠牲にもかかわらず、そこから最も得るものの少ない部分として、この期間を歯かみして過さねばならなかつた。

だが、われわれはその場限りの行動をもつてこれに処するのでなく、同盟の危機の根本的解明と、そこから真に労働者階級解放の党を建設する展望を見つけ出すために多くの同志と討論を重ねて来た。

この間、同盟内部においては、すでに戦旗二七号等に明らかにしたごとく、東大細胞の諸君の理論展開を皮切りに活発な論争が展開されて来た。

東大細胞と、それに対する田川・山崎同志の反論を中心に、二つに大別されていた論争は、ここしばらくの間に、学生同盟員諸君の内部における東大理論反対の潮流が生じたことにより、さらに新らしい要素を加えてきており、全同盟的規模の論争に発展しつつある。

この論文の署名者であるわれわれ三人の政治局員と三人の中央委員は、自からその責任においてこうした同盟内部の論争を正しく指導して行く立場にありながら、十分これを果し得ないことを深く自己批判する。しかし、われわれは、われわれ自身の検討によつて明らかにしたこれまでに同盟の欠陥を身をもつて正し、その責任を他の政治局員・中央委員の同志諸君とともに全同盟員諸君の支持のもとに全力をあげて果して行くつもりである。

われわれは、まずその第一歩として、多くの同志との討論の中から、一応安保斗争の総括と同盟再建の課題を成文化し、われわれの責任において発表する。われわれは、同盟建設の中心であるべき「戦旗」を、同盟の名において守り抜き、同盟の組織と活動を労対、学対、各細胞の諸君の精神的な支持のもとに維持しつつ、今後の論争を原則的に進めて行きたいと考える。

われわれがこの論文において明らかにしたことは、そのままわれわれ自身のこれまでの活動に対する批判であり、自己批判の不十分さは承知のうえで発表した。この総括自体にもきわめて多くの不十分さを含んでいるが、全同盟員諸君の積極的な批判の中で、討論を深めて行き、出来る限りそれを「戦旗」を中心に文書化して同盟にひろげたいと思つている。

さらに、これはわれわれの自己批判的検討の第一歩にすぎない。

われわれは、これに続いて次のような方向で討論を進めており、出来る限り早くこれを発表して行くつもりである。

第一、現在の階級関係を明らかにし、当面の課題を明らかにするために

イ、三池斗争の総括と労働運動の現状の検討

ロ、池田内閣の政策とそのもとにおける攻撃の具体的検討

ハ、賃金斗争を中心とする秋斗の把握

ニ、各産業別の合理化の実態とそこにおける斗争の追求

ホ、池田内閣打倒の十月学生運動組織化について

第二、基本的なものとしての、世界資本主義の下における日本資本主義の把握と、革命理論の性格の検討

第三、同盟理論の強化の方向として

イ、同盟理論の背景といわれているトロツキーのスターリン批判、黒田哲学、宇野経済学の全面的検討と同盟理論の批判的総括

ロ、現代資本主義の正確な把握（いわゆる国家独占資本主義論）

ハ、それとの関連における、ソ連、中国論の検討

第四、前衛党建設の遂行のために

同盟創立以来の党組織の検討と、党組織論の確立

（追記　本総括は全体を通じて幾多の不十分さをもち、今後の討論のなかで深めていかねばならないが、とくに第三章については、青山、田川の両名が基本的に異論をもつていることを附加えておく。それらの点については今後、いづれかの機会に明らかにされると思う）